

◆書評◆

竹家一美著

『日本の男性不妊』

当事者夫婦の語りから』

(晃洋書房 2021年 ISBN 978-4-7710-3472-3 2800円+税)



菅野 摂子

(埼玉大学 ダイバーシティ推進センター)

WHO が不妊の原因は男女半々にあるとの調査結果を公表してから 30 年が経過しようとしている。生殖医療に携わる泌尿器科医は女性側を診る産婦人科医に比べて少数であるものの、専門家のみならずメディアでも男性不妊は度々取り上げられてきた。

しかし、いざ自分が不妊であると宣告されると、多くの男性は動揺するのではないだろうか。妻が辛い不妊治療を受けていることを認知しつつ、自分が治療の対象になることが想像できない男性も少なくない。これまでの不妊をめぐるさまざまな調査研究は主に女性を対象としており、女性の当事者団体は、不妊治療のアンケートを行って一般に公表するなど積極的に活動してきた。対照的に、男性に対する調査はほとんど行われておらず、当事者としての男性の姿は見えてこない。それは男性が不妊について語らないからなのか。そもそも不妊は男性に問題として捉えられているのか。本書は不妊治療の主体として男性を捉え

ることで、日本の男性不妊にジェンダーの視点から輪郭を与える斬新な試みである。

本書は、主に研究の背景と位置づけ、および著者が行った調査の概要が書かれた前半部分、調査結果を提示し考察する後半部分の二部構成となっている。

まず、序章において、一般言説として男性不妊の態様を示したうえで著者の男性不妊への問題意識が述べられる。ここで著者は、「不妊は、ほとんどの社会でスティグマとみなされている。とりわけ男性不妊は、その不可視性ゆえに、生殖能力と性的能力とを結びつけて語られる傾向があるため、女性不妊よりもより強いスティグマになり得る」と仮説を立てる。以降、スティグマという用語は本書を貫く分析概念として使われることとなる。

第 I 部では、第 1 章から第 3 章で先行研究をレビューした後、リサーチクエスションとして次の 4 点を掲げる。1. 男性の語りによる男性自身の不妊の経験と意味づけ、2. 不妊治療における男性身体の意味づけ

と男性の身体経験、3. 妻の経験する男性不妊と対処、4. 夫婦間での男性不妊の情報開示と情報管理。なお、調査対象は、泌尿器科医による紹介が男性8名(そのうちの4名の妻がインタビューに応じた)、不妊の当事者団体から女性5名、不妊専門クリニックからの紹介が女性2名である。

4つのリサーチクエスションを受けて第II部では、男性不妊をめぐる分析が行われる。第4章の男性の語りから、ほとんどの男性が妻先行、妻主導で医療に入り、子どもを切望する妻のために治療に取り組んだことが描かれる。職場や親戚付き合いで困難を抱えたと語った人はほとんどいないが、全員が男性不妊という事象の存在や不妊の知識などへの社会の認知度を上げてほしいと要望していたという。第5章では男性の身体経験が医師と男性の語りから明らかにされる。男性不妊の診断をいかに伝えるのか、医師には各々の経験に基づいたやり方があるが、共通しているのは妻の同席を必須とし手術する対象を夫婦とみなしていることである。夫は手術に恐怖感があったと語るが、積極的に医師と関わろうとせず妻主導で治療が決められ、「不妊は女性の問題」というジェンダー構造が再生産される。翻って、11名の妻によって夫の不妊が語られるのが第6章である。ここでは夫が不妊と思われることの抵抗感や治療における孤軍奮闘、養子縁組に対する夫婦の温度差、セックスレスなど、さまざまな問

題が提起される。彼女らは夫の不妊を「真正面から受け止めて」不妊治療に取り組み、治療プロセスにおいて夫への配慮を怠らない。ここにケアする者とされる者というジェンダー規範が垣間見れるという。第7章では、男性不妊の開示をめぐる夫婦の戦略がテーマとなる。夫婦間では情報は共有されるが、親との個人的な関係や友人および職場での、夫婦間とは異なるやりとりはゴフマンのスティグマ論を援用して説明される。終章で、著者は結論を「男性不妊は妻の問題として位置づけられる」ということ、「男性不妊とは第一に『病気』として意味づけられるということ。したがって第二に、彼らにとって男性不妊は、必ずしもスティグマにはならないということ」という二点に集約する。

この結論に沿って、いくつかコメントしていく。一点目については男性不妊への対応にジェンダー規範が強く作用し、かつ再生産されている様子が細やかに描かれており、男性の治療は女性の治療なくしては妊娠に持ち込めないという事実からも、一定の説得力がある。ただ、二点目の男性が不妊という事象を「病気」と捉えることでスティグマの付与を免れている、という点は、違和感のあるところだ。「病気」であってもスティグマが貼られることは、障害者や不妊女性からの異議申し立てを見れば明らかである。「病気」と振り分けられることによって医療に誘導され不妊患者とされることをスティグマと感じる女性/男

性もいるだろう。本書はゴフマンのスティグマ論に依拠しているが、ゴフマン以降のスティグマに関する議論のなかでしばしば取り上げられる Barnes は、個人に対するスティグマを「自己スティグマ」とし、周囲の人々や社会環境を対象とする「公的スティグマ」、主に社会制度に関するものを「構造的スティグマ」と分節化している (Barnes 2017)。本テーマにおいて、社会的認知の促進は「公的スティグマ」への対応、男性と女性への同等な公的支援は「構造的スティグマ」への対応だが、「自己スティグマ」はどうだろうか。著者は男性不妊は性的能力と結び付けられるため男性は自らの不妊を「語らない」とする田中俊之の論考 (田中 2014) を男性の語りから反証しようとする。確かに著者が男性不妊の当事者であることをインタビューに打ち明け、医療情報のやり取りなどもしながらラポールを築き、男性の語りを引き出した時点で、男性は「語っている」とも言える。しかし、セックスレスを解決しないまま不妊治療に入ったものの成功せず、その後セクシュアリティの問題に戻れず離婚準備に入った女性 (L さん) の語り、不妊治療を始めて「夜の生活が変わった」という男性 (B さん) の語りは、分離されたはずの生殖と

セクシュアリティが、当事者の間では切り離されていないことを示している。B さん以外の男性から語られず、B さんも十分に説明できない、性的能力と生殖能力との絡まりが自己スティグマと言えるかどうかはさらなる検討が必要だが、パートナーシップの綻びが負い目になる可能性はある。

さらに、男性に対する侵襲的治療に著者の関心が向けられているため、不妊男性の日常での営みが後景化していることやや気になった。というのも、治療の対象は依然として女性の身体だが、他方で、男性側の配偶子である精子は絶えずつくられているため、その質を向上させるべく男性不妊の患者にはさまざまな生活上の制約が求められるからである。卵子がすでに身体にあり、「老化」することはあっても、その質を向上させる手立てのない女性とは対照的である。配偶子の差異も男性不妊を検討する際に考慮すべき点であろう。

本書は、男性不妊に光をあてた良質の書であり、論旨が整理されていることから、読者を難なく結論に導く。同時に、この折り目正しさからこぼれるものも逆に照射されるだろう。男性がそれでも語らないこと、一筋縄ではいかない日本の男性不妊について、本書を手を改めて考えたい。

## 参考文献

- Barnes, Steven J., 2017, 'The Three Faces of Stigma' *BC's Mental Health and Addictions Journal VISION* vol.13.No1.  
田中俊之, 2004, 『『男性問題』としての不妊—〈男らしさ〉と生殖能力の関係をめぐって』村岡潔ほか『不妊と男性』青弓社.